



2015年3月2日発行 第**559**号

CONTENTS

読後雑感：2015年 第5回 2
 上海街角インタビュー 69 7
 ホンダ「F1」復帰と近未来五輪 10
 【中国経済最新統計】 12

京都大学 経済学研究科 東アジア経済研究センター (旧上海センター)
 Center for East Asian Economic Studies, Graduate School of Economics, Kyoto University

Home 事業概要 組織構成 活動状況 最新情報 会員募集 お問い合わせ

最新情報
 2014.10.07 【イベント】 「中国経済研究会」のお知らせ
 2014.09.11 【イベント】 アジア自動車シンポジウムのお知らせ
 2014.08.12 【お知らせ】 センター協会の解散と支援会への移行について
 2014.07.14 【イベント】 第10回 アジア中古車流通研究会
 2014.07.14 【イベント】 中国経済研究会 (2014年度第3回)

News Letter
 Vol. 539
 2014.10.06
 最新号

研究会 シンポジウム・講演会・セミナー 会社説明会 会員募集 寄付のお願い

アクセス | リンク集 | プライバシーポリシー | サイトマップ
 Copyright (C) 京都大学経済学研究科「京大東アジア経済研究センター」, All Rights Reserved.

読後雑感：2015年 第5回

24. FEB. 15

アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事

株式会社小島衣料オーナー

東アジアセンター外部研究員

小島正憲

1. 「老耄と哲学」
2. 「日本人はどう死ぬべきか？」
3. 「0葬」
4. 「悩まない」
5. 「人は死んでもまた会える」

1. 「老耄と哲学」 梅原猛著 文藝春秋 2015年1月30日

帯の言葉：「私のこれからの人生は死や呆けとの鬼ごっこである」

著者の梅原猛氏は、あとがきで、「私は本書に“老耄と哲学”という題名をつけた。辞書によると、“老”は70歳を指し、“耄”は一説には90歳を指すという。数えの90歳である私は“耄”に達したといえる。“耄碌”という言葉があるように、90歳になるとやはり身体はもちろん脳も衰え、認知症に近い状態になるのが一般的であろう」と書いている。しかし90歳の梅原氏の著すこの本は、その題名に反して、“老耄”の書ではない。本書には、現代社会に対する梅原氏の鋭く、若々しい文明批評が、数多く書き込まれているからである。

反面、本書は、その題名に反して、“哲学”の書ではない、と私は思う。なぜなら、梅原氏は哲学を、「哲学とは、現代の世界はどのような世界であり、そこで人間はどう生きるべきかを体系的に思索する学問である。哲学者は現実に起こっている重大事から目を背けてはならない」と定義し、現代世界を「今、人類は二つの危機に直面していると思われる。一つは環境破壊の危機である。もう一つは核戦争の危機である」と分析している。この梅原氏の脳裏には、日本や世界の抱える超高齢社会の危機認識がまったく欠けているし、それを哲学的に解決しようとする試みも皆無だからである。今、高齢で孤高に聳える哲学者の梅原氏にもっとも期待されていることは、死生観を語り、模範的な死を遂げることである。

梅原氏は、「私は徴兵検査を受けて軍隊に入り、戦争というものがいかに残酷なものであるかを、身をもって知った最後の世代である」と綴っている。それでも梅原氏は、その修羅場を乗り切り、「現在の人類、特に先進国の人間は過去の人類が想像もしなかったような豊かで便利な生活を享受している。まさに人類は栄耀栄華の頂点を極めたといつてよかろう」という時代を生き切ってきた。その梅原氏が、「幻におびえる」という一章で、一昨年2月末のある朝、突然、右の顎にしこりができたので、医師の診察やCT検査などを受けたが、その結果が出るまで一か月ほど、幻におびえたと書いている。私は

この章を読んで、「戦争を乗り越え、栄耀栄華を極め、三度の癌を克服した梅原氏には、死の幻におびえることなく、泰然として病に臨んで欲しかった」と思った。なお梅原氏は、「残された何年かの人生をかけて、“人類哲学”を完成させたい」と書き、意気軒昂である。

2. 「日本人はどう死ぬべきか？」 養老孟司・隈研吾対談 日経BP社 2014年12月15日

帯の言葉 : 「先生、我々は墓場まで何をもっていけばいいですか？」

読めば気が楽になる解剖学者と建築家の師弟対談」

この本の題名は、「日本人はどう死ぬべきか？」であるが、本書全編を通して、その回答らしきものは全く見当たらない。隈氏も本書の最後で、「“日本人はどう死ぬべきか？”というタイトルで養老孟司先生とお話を重ねてきました。といっても、話題は四方八方に飛び、どこに“死”の話があるのかと怒られそうですが、その点はどうぞお許してください」と弁解している始末である。したがって、「日本人はどう死ぬべきか？」の解を求めて、この本を読んでも無駄である。以下に、この本の「死」に関する記述を拾い出して、書き出しておく。

- ・若い人にとって、年寄りには邪魔なんですよ。だって既得権を持っているでしょう。
- ・やっぱり自然に年を取って、なにも分からなくなって死んじゃうのが一番いいんでしょうね。癌みたいに余命とかがあんまり分かつちゃうのも嫌だね。最近は余計なお世話で、余命はいくらですとか言われるじゃないですか。
- ・そういう墓地の作り方にエジプト人的な死生観を感じますね。ミイラを作って遺体を保存するように、いつでも戻って来られるように、ということでしょう。
- ・だから諦念を持つことですよ。諦念は人が生き延びる知恵ですね。あと、人が死を怖がるのは、その過程で痛かったりつらかったりするからなんだろうけど、それは日本の医療が悪いんですよ。麻薬の医療用使用が世界で一番少ないのが日本なんだから。
- ・死に方を考えるほど、くだらないことはない、と、それはもう考えないことにしていますから。だって、考えているうちは生きている。だいたい結論は簡単ですよ。俺が死んでも、俺は困らねえ、と。
- ・極論を言えば、思いもよらぬ自然災害で死ぬということは、それこそ鴨長明の時代から受け継がれた、「日本人ならではの死に方」とも言えます。

3. 「0葬」 島田裕巳著 集英社 2014年1月29日

副題 : 「あっさり死ぬ」

帯の言葉 : 「“葬式も墓もいらぬ”という人のための、迷惑をかけない死に方入門」

この本は、帯に書いてある「迷惑をかけない死に方入門」というような俗っぽいハウツー本ではない。立派な哲学書である。島田氏は、日本安楽死協会の組織者の太田典礼氏の「社会にめいわくをかけて長生きしているのも少なくない。ドライないい方をすれば、もはや社会的に活動もできず、何の役にも立たなくなって生きているのは、社会的罪悪であり、その報いが、孤独である。老人孤独の最高の解決策として自殺をすすめたい。自由思想によれば、自殺は個人の自由であり、権利でさえもある。老人が、もはや生きている価値がないとき自殺するのは、最善の社会的人間的行為である」という文章を引用し、その主張の延長線上で、「社会的に価値のなくなった老人が亡くなっても、わざわざ葬儀をする必要はない」と、「葬式無用論」を展開している。私も同感である。同時に、私はこの太田氏の過激な文章が、1976年のものであり、いまだ高齢化社会が話題になる前のことであったことにも、はなはだ驚かされた。

島田氏は本書で、「社会は大きく変わり、死のあり方そのものが根本的に変容してきたことから考えれば、従来の方法は意味をなさない。極端な言い方をすれば、もう人を葬り、弔う必要はなくなっている。遺体を処理すればそれでいい。そんな時代が訪れている。それは自由だということである」、「昔は、今日のように、多くの人が長寿をまっとうできる状況にはなかった。乳幼児の死亡率も高かったし、病気や災害、あるいは戦争などで、若いときに命を落とすことが少なくなかった。高齢での大往生を望んでも、それが容易には実現されない状況にあった。そうした状況では、それぞれの死者はもっと生きたいと思いつつ亡くなり、無念さを持っていることが前提となっていた。その無念さを晴らすために、残された者が供養を続け、その功德によって西方極楽浄土へ導いていく。そうした浄土教信仰のストーリーが、広く受け入れられた。死が無念なものである以上、遺族は故人に成り代わってその無念さを晴らす必要があり、死は人生における挫折と位置づけられた。もちろん、昔も長寿をまっとうする人はいたが、その数は少なかった」と書き、「高齢での死は、そのまま十分に“大往生”と言えるもので、遺族も故人は現世での生活を満喫し、謳歌した上で亡くなったと考えている。果たしてそうした死者のために、遺族が功德を積み、それを回向として振り向ける必要があるのだろうか」と述べている。

この島田氏の主張に、私は大賛成である。従来から私も、やがて後期高齢者となる団塊の世代について、「飢餓を体験せず、戦争にも狩り出されず、長寿をまっとうしようとしている。こんな幸せな世代は、人類史上、かつてなかった。これ以上なにを望むのか」と考え、「社会に役立って自殺する」、つまり「老人決死隊」を主張してきた。太田氏は、「老人が、もはや生きている価値がないとき自殺するのは、最善の社会的人間的行為である」と説いているが、私は、「人生の最後まで、社会に役立つべきであり、役立つことができる」と確信している。そのためには、それまで体力と脳力を保持しなければならないし、我が身を捧げる場所とタイミングを見計らわなければならない。なによりも、最後のとき、逡巡し、笑いものにならぬよう、胆力を鍛えねばならない。

4. 「悩まない」 矢作直樹著 ダイアモンド社 2014年7月25日

副題 : 「あるがままで今を生きる」

期待に反して、この本はあまり含蓄のないものだった。矢作氏は本書で、「死は生物と

しての宿命ですが、死は同時に私たちの“次の生”への出発点です。私たちの本質である“魂”は永遠不変の存在であり、肉体が減んでも私たちの本質が減びることはありません。とは言え、今回の人生はこれっきりです、「悩みと上手に付き合いながら、今を楽しむ。今を楽しむことで、生きていることを実感する。これが人生で最も大切なことです」、「重い病気になろうとなるまいと、私たちは遅かれ早かれ死ぬのです。自分がいつ他界しても悔いが残ることのないように毎日を生き切る。これが私の言う心がまえです」と書いているが、これらの言はあまりにも常識的で説得力を持たない。

矢作氏は、「糖尿病治療の基本は、食事と運動です。そこに尽きます。食事と運動で効果が不十分な時に薬を服用するのが正しい治療であって、薬が全部治してくれるわけではないのです。最後はその人の本気の度合いにかかっています。悪化すると、視力や足だけでなく命も落とします」と書き糖尿病患者を脅かしているが、糖尿病を患っている私にとってみれば、その食事と運動療法をうまくやることができないのであり、矢作氏の言は凡人の助けにはならない。

矢作氏は、「特に高齢者に関して言えば、今後が予見できれば、その人にとってそれ以上の医療は必要なくなります。これ以上の投薬は意味がない、手術をしても効果は薄い、加齢を考えた上で予見すると必然的に次の選択肢が見えるのです。これが“うまい死に方”の方程式です」と書いている。私にはその方程式の解がよくわからない。

最後に矢作氏は、「身内や親しい人が亡くなると人は泣いて悔しがりますが、私たちが元いたあちらの世界では祝福です。皆から“おめでとう、よく頑張ったね。積もる話を聞かせてよ”という感じです。それを考えるとお葬式も、もっとどんちゃんやってもいいのかなとも思ったりします。今のお葬式は遺された人だけの仕組みになっている気がします。そういう“あっちの世界とこっちの世界”の仕組みを知るためのテーマパークが実現すると面白いかもしれません。その仕組みを知ると、おそらく大半の方の生き方が変わるのではないのでしょうか。もっと学ぼうという気になります。“死に場所”にこだわることも、やめましょう。どこで死んでも、大丈夫です」と書いている。この言葉も、私には冗談にしか思えないし、まったく説得力を持たないものである。今、大事なことは、超高齢社会の人間の死に方や死に場所を、真剣に論じることである。

5. 「人は死んでもまた会える」 ひろさちや著 青春出版社 2015年2月10日

副題 : 「仏教が教える永遠の絆」

帯の言葉 : 「さて、向こうで何から話しましょうか」

ひろさちや氏は、「お浄土は、わたしたちの心の中にあります。愛した人とお浄土で再会できる。怨み・憎んだ人ともお浄土で和解できる。そう信じたとき、わたしたちの心の中にお浄土があります。そしていつの日か、そのお浄土にわたしたちは帰るのです。いや、もうすぐですね」と言い、そのときのお土産について、「わたしたちがなすべきことは、お浄土へのお土産、つまり思い出をいっぱいつくることです。悲しみの体験・つらかったこと・失敗したこと、それらがお土産になります。自慢話はお土産にならないでしょう。わたしの成功はたいてい他人の無念さの上でのものです。“わたしは娑婆で巨万の富を築きました”と報告しても、お浄土の人はかえってあなたを軽蔑するでしょう。巨万の富を築いた人は、それだけ貧乏人を苛めたことになります。それよりは、あなたの失敗談のほう、いいお

土産になります。娑婆世界においては、この世で怨み・憎んだ人とも会います」と語っている。

このように、ひろ氏は宗教学者として、私を含む「死の恐怖に直面している」日本の高齢者に、やさしい言葉で引導を渡している。ひろ氏の言葉がわからないわけではないが、私は、これで「心安らかに、死に赴く」という気持ちにはなれない。ひろ氏はやがて80歳に成ろうとしている。私は、仏教原理主義者としてのひろ氏の、主張に準じた往生際を学ばせていただこうと思っている。

なお、ひろ氏はこの本で、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教、仏教と通底する考えとして、「死後のことは、いっさい絶対者におまかせする。それが、仏教を含めた普遍的宗教の考え方だと思います。普遍的宗教というのは、民俗宗教の枠を超越した宗教です」と書いている。

以上

上海街角インタビュー ⑥9

社団法人大阪能率協会アジア・中国事業支援室副室長（海外委員）

順利包装集団董事（在上海）

福喜多技術士事務所所長

福喜多俊夫

上海人は朝食に何を食べているのか？

私が知る上海人の朝食は油条と豆乳で、今でも朝、道路沿いには多くの店が営業している。しかし、事務所の社員は豆乳とお好み焼き風の薄い焼き物（中国では大餅という）を食べたり、菓子パンと牛乳であったり、バナナ1本で済ませる人もいる。日本の朝食がご飯とみそ汁からパンとコーヒーに変化したように上海人の朝食も変わってきているのだろうか？

1. 20歳代後半の女性 既婚

私は子供の頃から大餅と油条と豆乳で育ちました。今でもこれらが大好きです。でも、今の生活は通勤途上でのんびり買い物をしている時間がなく、パンと牛乳を持って事務所で食べる生活です。両親はお茶漬けと漬物が大好きで、昨夜の残り物のご飯をお茶漬けにして食べています。

2. 40歳代中頃の男性 既婚

朝食は家内が子どもの分といっしょに作ってくれます。レパートリーは結構豊富で、大餅、サンドイッチ、麺、おにぎりや味噌汁、菓子パンと豆乳など。偶にヨーグルトや果物が付きます。ただ、私は6時40分に家を出るので、いつも半分より食べられません。我社の独身社員は途中で大餅や饅頭と豆乳を買ってきて食べています。中国人はまだコーヒーを飲む人は少ないです。スターバックスが流行っているって？ あれは都会派若者のファッションです。

3. 40歳代後半の女性 既婚

私は昔ながらの油条や大餅と豆乳を食べます。でも、主人はトーストと牛乳かジュースです。

4. 30歳代前半の女性 既婚

毎朝、母が子どものためにおかゆを作り、豆乳を飲ませています。私にはおかゆと卵あるいはコーンフレークと豆乳を準備してくれます。主人も私と同じものを食べています。

休日の朝には家族で、麺や水餃子の店へ出かけます。

私の朝食のスタイルは大学の寮、会社の寮生活と変化しましたが、結婚してから

はまったく変化していません。

5. 50歳代前半の男性 既婚

朝食は前日の残りご飯にお湯を入れて、電子レンジで加熱して食べます。これが50%くらい。あとの日は饅頭かパンです。大体毎日牛乳を飲みます。

若い人は朝食を家で食べるために早く起きるのが嫌なので、通勤途中で大餅か油条と豆乳を買って会社で食べます。田舎の人は早起きだけど、都会人は朝寝坊です。私は7時に起きるので、朝は忙しいです。

6. 40歳代前半の男性 既婚

私は前夜の残り飯にお湯をかけた「泡飯」と残り物のおかずを温めて食べます。娘は全寮制の高校なのでおいしい朝食を食べているらしいです。(食堂の献立がよくできていると上海で有名) 土日とか冬休みは家でパンと豆乳を食べています。

上海人の朝食には昔から「四大金剛」と言われるものがあります。「大餅(ダーピン)」

「油条(ヨウティヤオ)」、「豆ジャン」、「粢飯(ツイハン)」です。

「大餅」はお好み焼き風の薄い焼き物、「油条」は中華風揚げパン、「豆ジャン」は豆乳、「粢飯」は中華風もち米おにぎりです。最近では地方から上海へやってきた田舎者が増えたので、上海の古き良き伝統が失われつつあり寂しいです。

7. 40歳代中頃の女性 既婚

小学校1年生の子どもは、トーストにハムを載せて食べ、ブルーベリージュースを飲んでます。主人はトーストとコーヒー。私は準備に忙しくて食べる暇がないので、子供を学校へ送ったあとゆっくりパンと豆乳を楽しみます。コーヒーを飲むのは主人だけ、私は飲みません。

8. 20歳代中頃の男性 独身

朝、地下鉄を降りてから会社へ行く途中で、パンとコーヒーを買ったり、大餅を買ったり、その日の気分で選びます。

9. 20歳代前半の女性 学生

大学院生なので朝ゆっくりできます。殆どは祖母が作ってくれる朝食を食べます。パンとゆで卵、温野菜にコーヒーが定番です。

10. 30歳代後半の女性 既婚

子どもが早く食べられるようにパンと豆乳が中心です。季節の果物を少しつけてやります。主人と私は子供を送っていかねばならないので、ゆっくりできません。大急ぎでパンを豆乳で流し込んでいます。

休日は近所の店で朝昼兼用の水餃子を食べたり、サンドイッチを食べたりしま

す。

幼稚園や小学校に通っている子供のいる家庭は家で朝食をとり、独身者は通勤途中で朝食を買って会社で食べるのが一般的なようだ。皆さん、朝起きるのが結構遅いようで、子供もパン食が多い様子。また、昨夜の残りご飯にお湯をかけて食べる人も多い。

油条や大餅も依然として好まれており、伝統食が消えるのを嘆く人もいたが、伝統食はしぶとく生き残っている様子が伺えた。

因みに、私の上海での朝食はトースト1枚にマーマレードをつけ、リンゴ1個、温めた牛乳（時々ココアを入れてミルクココアにする）。

以上

ホンダ「F1」復帰と近未来五輪

27. FEB. 15

アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事

株式会社小島衣料オーナー

東アジアセンター外部研究員

小島正憲

7年前に「F1」から撤退したホンダが、復帰することになった。ホンダが撤退したのは、リーマンショックの中、業績が悪化し、エンジンの開発費や運営費など、年間400～500億円をかけてレースを続けるのは難しいとの理由からだ。そのホンダが再挑戦することになった背景には、F1ルールの改正があるという。

2014年のルール改正では、エンジンの排気量が小さくなり、同時にブレーキをかけたときに発生するエネルギーと、エンジンの排熱を動力に変換するシステムの搭載を義務付けられた。排熱を利用するシステムは市販車向けにはまだ実用化されておらず、ホンダは世界最高峰のモータースポーツの舞台で技術に磨きをかけることができると考えたようだ。その事情をホンダの伊東孝紳社長は、「新しく導入された環境技術の追求、究極のエネルギーマネジメントへのチャレンジ。明日のホンダへの卓越した技術につながる」と語っている。昨今のホンダは、主力小型車「フィット」のハイブリッド車での度重なるリコールやタカタ製エアバッグの欠陥など品質問題などで揺さぶられ、「技術のホンダ」の看板に傷がつかけている。そのような時期だけに、起死回生を狙っての「F1」復帰もわからないわけではない。2月23日、

「F1」復帰の提唱者である当の伊東社長の社長交代人事が発表された。「技術のホンダ」がなにやら迷走気味でもある。

しかしここで私が注目するのは、ホンダの内部事情ではなく、「F1」のルール変更である。私たち人類が生きてきた現代は、資源浪費でかつ環境汚染型の社会であり、その代表作の一つがモータリゼーションであった。そしてその象徴として「F1」があった。その現代社会も、資源の枯渇、地球温暖化などの破滅的進行の前に、現在、人類は解決策を見出せず、ただ呆然と立ち尽くしている。まさに今が、人類は大きくその生き様を見直し、大きくルールを変更し、社会を変革していかなければならないときなのである。そのとき

「F1」が、「究極のエネルギーマネジメントと環境技術の追求」を掲げて、ルール変更に踏み切った。つまり資源浪費・環境汚染型社会からの脱皮を旗印に掲げ、新たな社会への挑戦を始めたのである。私はここに大きな意味があると思う。

2020年、オリンピックが東京で開催される。近代オリンピックは1896年、フランスのクーベルタン男爵の提唱により、スポーツと平和の祭典として開催され、爾来、幾多の荒波を超えて、現代に至っている。近代オリンピックは、当初から、

「より速く、より高く、より強く」を競うスポーツの祭典」として催されてきた。そしてそれらの大会は、平和の祭典としてそれなりの役割を果たしてきた。しかし各大会を経るごとに、競技種目が増加し、大会規模も拡大し、各国がその豪華さを競うようなものとなり、財政的負担も増してきた。反面、現在では、オリンピックが開催都市や国の経済活性化に大きな役割を果たすと考えられるようになり、官民挙げての誘致合戦を繰り返す次第となっている。今、日本社会はメディアを含め、来るべき東京五輪で金メダルを取ることに、熱中している。

ここには現代社会が抱える資源浪費・環境汚染への視点はまったく欠如している。しかも日本社会には、高齢化先進国という課題が重なってきている。せっかくの機会だから、「F1」のように、ここで大きくルールを変更し、その音頭を日本が取り、新たなオリンピックに衣替えするべきではないのか。「たらふく食べて、豪華な施設で体を鍛え」て、つまり資源を浪費して、「より速く、より高く、より強く」を競うのではなくて、「より少なく食べて、そのエネルギー効率」を競うような競技を案出すべきではないのか。この際、少資源で高効率を競う、「同じ人間ならば、資源を少なく使い生き延びるのが優秀」という日本発の思想を世界に発信するのも一興であろう。たとえば、「1か月間の断食後、体力を競う」のであれば、私でも大男に勝てそうな気がする。これならば、体格で劣る日本人でも、金メダルを独占できるような気がする。今のところ私の頭には、高齢化に関する競技のアイデアは浮かんでいないが、衆知を結集すれば、きっとおもしろいものが案出されると思う。人類は今、大きくルールを変更して、近未来五輪を創出しなければならぬ時期にさしかかっていると、私は思う。

以上

【中国経済最新統計】

	① 実質 GDP 増加率 (%)	② 工業付 加価値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億ドル)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009年	9.1	11.0	15.5	▲0.7	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011年	9.2	13.9	17.1	5.4	24.0	1549	20.3	24.9	1.1	9.7	13.6	14.3
2012年	7.7	10.0	14.3	2.7	20.7	2303	7.9	4.3	▲10.1	▲3.7	13.8	15.0
12月	7.9	10.3	15.2	2.5	18.8	316	14.0	6.0	-7.8	-4.5	14.4	15.0
2013年	7.7	9.7	11.4	2.6								14.1
1月				2.0	20.8	291	25.0	29.0	-12.4	-3.4	15.9	15.4
2月				3.2		153	21.7	-14.9	-35.6	6.3	15.2	15.1
3月	7.7	8.9	12.6	2.1	21.5	-9	10.0	14.2	-19.7	5.7	15.7	14.9
4月		9.3	12.8	2.4	19.8	182	14.6	16.6	13.9	0.4	16.1	14.9
5月		9.2	12.9	2.1	19.7	204	0.9	-0.1	-14.4	0.3	15.8	14.5
6月	7.5	8.9	13.3	2.7	19.9	271	-3.3	-0.9	-17.3	20.1	14.0	14.1
7月		9.7	13.2	2.7	20.2	178	5.1	10.8	1.2	24.1	14.5	14.3
8月		10.4	13.4	2.6	21.4	285	7.1	7.1	-11.7	0.6	14.7	14.1
9月	7.8	10.2	13.3	3.1	19.6	152	-0.4	7.4	-16.8	4.9	14.2	14.3
10月		10.3	13.3	3.2	19.2	311	5.6	7.5	-8.2	1.2	14.3	14.1
11月		10.0	13.7	3.0	17.6	338	12.7	5.4	-9.3	2.3	14.2	14.2
12月	7.7	9.7	13.6	2.5	17.2	256	4.3	8.6	-3.4	-42.6	13.6	14.1
2014年												
1月				2.5	19.8	319	10.5	10.8	-8.6	-4.5	13.2	14.3
2月				2.0		-230	-18.1	10.4	1.3	4.0	13.3	14.2
3月	7.4	8.8	12.2	2.4	17.3	77	-6.6	-11.3	6.1	-1.5	12.1	13.9
4月		8.7	11.9	1.8	16.6	185	0.8	0.7	0.5	3.4	13.2	13.7
5月		8.8	12.5	2.5	16.9	359	7.0	-1.7	8.4	-6.6	13.4	13.9
6月	7.5	9.2	12.4	2.3	17.9	316	7.2	5.5	10.3	0.2	14.7	14.0
7月		9.0	12.2	2.3	15.6	473	14.5	-1.5	14.0	-17.0	13.5	13.4
8月		6.9	11.9	2.0	13.3	498	9.4	-2.1	5.2	-14.0	12.8	13.3
9月	7.3	8.0	11.6	1.6	11.5	310	15.1	7.2	9.4	1.9	11.6	13.2
10月		7.7	11.5	1.6	13.9	454	11.6	4.6	8.7	1.3	12.1	13.2
11月		7.2	11.7	1.4	13.4	545	4.7	-6.7	-8.6	22.2	12.0	13.4
12月	7.3	7.9	11.9	1.5	12.6	496	9.5	-2.3	6.1	10.3	11.0	13.6
2015年												
1月				0.8		600	-3.3	-20.0	2.2	-1.1	10.6	14.3

- 注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。
2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1月と2月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、（ ）内の数字は1月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。
3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の86%（2007年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。